

なもしろ 学校 参観日

「コンコン、コンコン」。木と木がぶつかる小さく乾いた音が、波紋のようにグラウンドに広がった。

今日2日、市立楠小。午前中に1度ある20分間の休憩時間に、全校児童657人が一斉にけん玉を始め、「玉」を浮かせ「皿」で受ける。児童は心地よい音を伴い、その動きを繰り返していた。先端部の「けん先」に玉を入れる技を決め、ガッツポーズを取る児童がいた。上級生が下級生に、技を教える姿もあった。同小は「雨の日も元気がいっぱい遊べる」と、約20年前から全校でけん玉を導入。現在、全ての児童・教諭が自前のけん玉を持っているという珍しい学校だ。子供への効果について、生田晴良校長55は「場所を取らず、体全体を使える遊び。集中力や、物事に根気よく取り組む力も養える」と話す。

生田校長は子供がテレビゲームで遊ぶことが多くなり、他者とのかわりが減っているのが気がかりだったが、「けん玉を仲間とやっていると、みんなと一緒に上達しようと、思いやりの心も身につく」と語る。1年担任の家原慎太郎教諭34によると、「その技もちょっと、惜しい」と励ましたり「うまくなった

全校一斉 けん玉響く

泉大津市立楠小学校

(泉大津市我孫子)

1980年に創立。校区には多くの水田があり、現在の校舎は当時ため池だった場所を埋め立て建設された。10年前、学校西側を流れる大津川沿いに新興住宅地ができ児童数が急増。現在の全校児童は657人で、市内の公立小8校のうち、3番目に児童数の多い小学校となった。創立から5年ごとに学校と周辺地域の航空写真を撮影しており、街の変化が一目でわかるようにしている。創立35周年を迎える来春は、児童らが校章の人文字をつくって祝う予定。

共に上達 自信や思いやり

なと褒めたりすることで、でも積極的に意見を言える児童に自信が芽生え、授業 ようになる傾向があるとい



全校児童が一斉に取り組むけん玉遊び。真剣な中にも時折、笑顔がのぞく(泉大津市立楠小学校で)

亀崎結唯さん(7)は「練習したら玉が皿に何度も乗るようになった。お母さんや先生に褒められるとすごくうれしい。もっと上手になりたい」と笑顔で技を披露してくれた。同小で毎年妙技を披露し、児童を喜ばせているけん玉師の重木洋さん(26)も

「手軽だけど、やればやるだけ上達できる。10歳の頃に始め、得意なものがなかった自分を勇気づけてくれた」と振り返る。児童は普段、休憩時間や放課後に個別に練習。5月と12月の「けん玉週間」には、全学年がグラウンドで技を披露し合ったり、教え合ったりする。冬には、全校大会も。泉大津市教委によると、市内の小学校で、けん玉を取り入れる学校が増えているという。

立命館大産業社会学部の山下芳樹教授は「けん玉は一点を集中して見つめ、手足をうまく動かすよう努力する。『コンコン』という心地よい音を聞くことも含め、成長過程の子供の感覚を研ぎ澄ます効果がある」と話す。



6年生が製作したゲームで、グループが楽しむ「楠オリンピック」は同小の伝統行事だ。

リーダー育む 楠オリンピック

今年も11月下旬に開かれ、段ボールでピースを作ったパズルや、風船にテープを貼り、割らずにはがすゲームなどで楽しんだ。写真。何人かの下級生から「6年になったらリーダーになって楠オリンピックを進めたい」との声が上がっているといい、生田校長は「上級生の活躍を見て、人の役に立ちたい」との気持ちが生きているようだ」と手応えを感じている。

放課後 小さな道具で一体感

愛媛県の山あいの町に住んでいた小学校低学年の頃、竹馬や缶蹴りなどの昔遊びに親しんだ。毎日のように日暮れまで遊んだ。けん玉もその一つで、下手だった私に友人が丁寧に教えてくれた思い出がある。今回

う姿には「この小さなけん玉一つで、これだけの一体感が生まれるのか」と驚かされた。

大がかりな道具がなくても、体全体を使って仲間と楽しめる。心も体も育てるそんな昔遊びを楽しめる環境づくりを、私たち大人がもっと進めなければと思った。

(横田加奈)